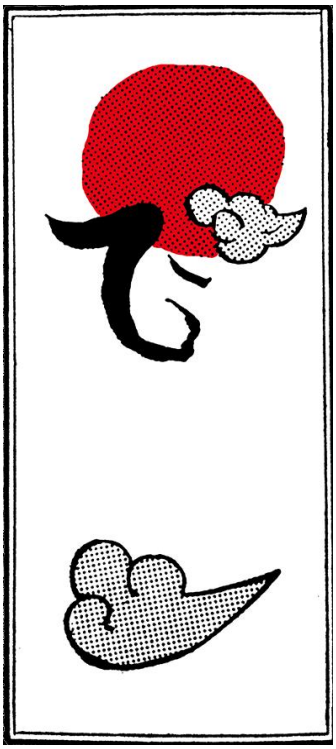

第44号
月一回発行
**ひの心を継ぐ会**
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲720-1
TEL：080-2986-0856

## 領綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

## 神道（十三）（大和世界の建設）

竹葉 秀雄

### 古事記

神秘的方法(1)

さて、此ようなイデヤの世界が現実のわれわれの世界から分離され、天上的・神的な理想界とされたが、ではどうして地上の哲学者はあのイデヤ界を認識するのか。またどうすれば現実の不完全な世界をあの理想の世界に近づけ得るのか。これがプラトンの最大の関心事であった。そこで、プラトン哲学では、この世界をあの世界に結ぶ媒介者としてプシュケ Psyche（霊魂）が中心話題とされた。彼は、オルフェウス教的すなわちピュタゴラス的な霊魂観によって、霊魂は落ちて肉体に宿るが、本来は天上的な存在であり不死であると考え、その証明につとめた。われわれが肉体のうちにおりながら、あるイデヤ（たとえば美のイデヤ）を認識するのは、実はわれわれに宿る霊魂が地上の個物（美しいといわれるあるもの）にそのイデヤの影を見て、これを機会にかって天上で直視していたそのイデヤを想起することである。これが真理認識についてのプラトンの想起 anamnesis の説なるものである。われわれは地上の美しいものを見ていっそう美しいものを欲求し、ついに絶対的に美なるものを思慕するに至るが、それはわれわれの霊魂がイデヤ界への郷愁すなわちエロス eros（愛慕の情）をもつからである。われわれはこのエロスに動かされて真なるもの善美なるものへと近づく。イデヤそれ自らは永遠不動であるが、霊魂はこれにひかれて自ら動きながらその宿る他の「一切を動かすところの」「一切の運動の」原動力である。ソクラテスは主として人間の霊魂の意識的・知的な面を問題としたが、プラトンは、道徳的行為における体験を反省して同じ一つの霊魂のうちに三部分、すなわち真の善を認識してこれを下に指令する理性的部分と、この命令に反抗しがちな欲情的部分と、両部分の中間にあって欲情の反抗をおさえつつ理性の命令にしたがって奮起する気概的部分とに区分した。

これは日本神道の中の霊魂観の三魂また四魂説と考え合わせ面白いが、これは後に譲る。霊魂説は神道に於て最も深く精微を極めている。

# 農士道

## 第四章 士道論
### ～第四節 士たるの生活～

菅原 兵治

**義士、国士**

かくて私はその一典型として彼の赤穂の四十七義士を見る。彼等は君臣の義を全うせんが為に、或は父母兄弟を、或は妻子知人を、或は珍宝財貨を、或は体面世評を、而して己が生命を、それらの一切を犠牲にしてまでも、敢然として其の雄々しくも悲壮極りなき「志」の実現にあらゆる惨憺たる苦難を冒して邁往し続けたのである。其の高潔なる志操こそ、千古に万人をして敬仰措く能わざらしむる「義士」たらしめし原動力ではないか。

同様に天保の代に「百姓たりと雖も二君に事えず」との志念の下に、其の敬慕措かぬ藩候転封の幕命取止め歎願の為に、百難を冒して必死の奔走を続けし荘内藩の農民の如きは、当に義民というにふさわしかるべく、又、享保の凶作の時、明年の麦種子だけは死んでも残さねばならぬとの悲願より、飢餓の極も遂に猶麦俵をしっかりと抱いて、莞爾として大往生を遂げし伊予の百姓作兵衛の如きは、当に義農の名に背かぬであろう。共に亦正毅なる「志」に徹せし者である。

猶私は、仮令国はかわれど西哲ソクラテスが獄中に於て、既に死刑の宣告を受けた時に、門人クリトンが頻りに脱獄を勧誘し哀願したのに対して、毅然として戒め教えた次の言は、流石は哲人ソクラテスの言なるかなと思う。千歳の下猶その凛烈たる士気の懦夫をして起たしむるものがある。

「最も尊重せらるべきは生きること其のものではなくて、善く生きることであると言ったことが今でも我々にとって変りあるまい。」

「喜く生きることと、美しく生きること、正しく生きることとは同じだということとも変りあるまい。」

「そこで、考えて見なければならない。―僕がアテナイ人の同意なしに此処から逃げ出そうと企てることは正しいか、それとも正しくないかを。そして若し正しいとわかればやって見ようし、そうでなければ思い止るとしよう。然し君が考慮の中に置くべきものとして挙げた費用や世評や子供の養育などに関する諸問題はクリトンよ、此等の事は其の実、軽率に人を殺すかと思えば、又何らの熟慮なしに出来るならば之を蘇生させて見たいなどと考える人達の、即ち多数者(衆愚)の考慮する事柄なのだ。寧ろ僕達は理性の命ずる処に従って唯この点のみを考慮しなければならない。―即ち吾々が今言ったように盗出しの手先になる者に金銭を与えたり、謝意を表したり、又盗み出さるるままになったりすることは果して正しい行為であるか否かを。そうして若しそんな行為は不正であると分れば、吾々は不正に陥らずに済む代りに、此処に止ってじっとして居れば殺されるか、他の憂目に遇わなければならないなどということは、最早や考慮しないことにしなければならない。」

如何に荘厳なる国士の壮志であろう。

# 不重則不威

三浦 夏南

論語の中に「重からざれば則ち威あらず、学ぶも則ち固からず」という言葉がある。この章の読み方には諸説あるが、山崎闇斎の学問を好む自分としては、朱子の読み方を取りたいと思う。重からざれば則ち威あらずとは、心に重々しいところがなければ、外面に威厳が現れないという意味であり、学ぶも則ち固からずは、その様に、内に重厚、外に威厳がある慎み深い人物でなければ、例え学問によって真理を明らかにして行ったとしても、その内容は堅固なものとはなり得ず、軽はずみな結論に到達してしまうという意味である。この章では「重」という言葉が中心となっているが、この「重」とは闇斎の高弟絅斎によれば、「存養」の事であり、朱子は「敬」であると言っている。つまり内に慎むことであり、そこから発する重厚さがなければ、学問をしても確かなことは掴み得ぬということである。

朱子、絅斎の解説に従って論語を読んでいると、学ぶ者が早合点をする軽率さを戒めるところが多いことに気付く。そして熟読玩味して自ずから内面的に自得されることを重視するのである。論語の第一章には「学びて時にこれを習うまた説ばしからずや」という言葉があるが、この「説ばしい」という内からこみ上げてくる感情が学問の根本である。しかし人間はすぐに頭で理解できたり、目先に実用的であることに向かい易い。学問をするからには出来るだけ早く効果を求めたいのが俗人の心である。しかし学問によって学ぶ真理とはそう簡単にたどり着けるものではなく、そこには長い道のりをあらかじめ覚悟し、重々しくゆったりとした態度で以て学に向かわなければならない。

本居宣長の言葉に、「学問は広く深くしなければならない」「学問は畢竟長く続けることである」といったものがあるが、これも同じことを伝えようとしていると思う。特に学問は広く深くといった表現が面白い。普通は「狭く深く」か、「広く浅く」かどちらかということを初学者は願うものである。そこに「広く深く」という皮肉な結論を挙げたのは、それが本居宣長という碩学の実感であったと同時に、少しでも楽をしたい、早く悟りたいと願う人々に対する厳粛な戒めでもあったのではないだろうか。

今の世の中は学問に限らず、あらゆるものが「早い」「便利」「客観的」「分かりやすい」「誰にでも分かる」といった概念で作られている。そういった軽薄な軽はずみな世にこそ、重厚で慎重な学問が必要なのである。我々の魂は現世のみでなく、来世にも生きて、この宇宙とともに限りなく永い時間を生きている。そんな奥深い魂の真理が「早く」「便利」に分かろうはずがないではないか。悠久の歴史の中でこの時代に自分として生まれて来た唯一無二の存在である自分自身を「客観的」で「誰にでも分かる」普遍的な把握の仕方で理解できようがないのである。自己の奥底で「説ばしい」としか表現できない実感を積み重ねて行くことでしか到達出来ず、人には知り得ない自己の内に見出して行くより外に道はないのである。それは世間から見れば、「重厚威厳」ではなく、「愚鈍」であり「偏屈」であり「傲慢」でさえあるかもしれないが、如何に愚かで歩みの鈍いものであったとしても、この学問をこそ継続して行きたいと思う。

## とよくも農園だより

三浦 美恵

日中はまだ暖かい日が多いですが、朝晩はひんやりとしており、冬の訪れを感じます。今月もネギがぐんぐんと成長し、葉先まで深緑でパリッと張りのある美しいネギがたくさん育ちました。ちょうどコロナの自粛要請も解除されてネギの値段が上がったため、日夜収穫に邁進した一カ月となりました。朝は日の出とともに出発し、その日出荷できる量のネギをキャリー一杯に収穫、昼休憩以外は家に入ることもなくネギの皮をむき、夕方一旦青果会社に出荷してご飯を食べた後はまた倉庫に籠り、九時まで出荷調整作業に明け暮れました。周年栽培の作物をしているとあまり農閑期は無く、次々と育つネギに追われる毎日です。その反面一年間で何度も挑戦できるため、ネギ栽培のコツや要所は押さえられるようになったと感じています。トンネル資材も購入し、真冬のネギ栽培の準備も進めています。

アスパラガスは遂に寒さで生育が止まり、一年間育てた親株も随分と紅葉して黄色くなってきています。この葉が枯れることで、来年のアスパラガスがぐんと成長するそうです。里芋はほとんどの収穫を終え、残りは毎年高値時期に当たる年始に掘る予定です。

農業は、ネギの出荷調整作業だけをとっても、ネギの皮をむく、皮をむいたネギをキャリーに入れる、一束を測って紐で縛り、段ボールに積める、残渣を倉庫外に運ぶ、といった子供でもできる簡単な作業が多いため、息子たちのできるお手伝いも日々増えてきています。今後もネギ・アスパラガス・里芋の栽培を主軸に、少しずつ米・麦・大豆・その他諸々の野菜を育て、子供たちとともに、家族での自給自足農業に一歩ずつ近づいてゆきたいと思います。

**★今後の予定**

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

**★一燈照偶 万燈照国**

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

**★年会費**

| | |
|---|---|
| 一般会員 | 三千円 |
| 賛助会員 | 一万円 |
| 特別賛助会員 | 三万円 |
| 支援会員 | 一万円 |

**★お知らせ**

新型コロナウイルス感染症が流行している状況を受け、参加者の健康と安全を最優先に考慮し、醒庵忌の開催を中止することといたしました。何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。